

小泉八雲と服部一三

—富山大学附属図書館ヘルン文庫の調査から見えてきた意外な関係—

中川 智視

1. 明治三陸地震の未確認資料について

発表者の2年間の調査は、1896年6月15日に発生した明治三陸地震の未確認資料 *The Great Disaster in Japan, June 15th, 1896* を、大震災の直後にラフカディオ・ハーン（日本名 小泉八雲：1850-1904）の蔵書を収蔵した富山大学附属図書館ヘルン文庫で発見したことに始まる。¹

発見の経緯を紹介したい。2011年4月、非常勤先の大学の授業開始が東日本大震災のため遅らされたことを受けて、私は1週間ほどヘルン文庫の調査に向かい、GDJを偶然発見した。その後、調査の過程でこの資料が未確認で、かつ富山大学附属図書館だけが所蔵する資料であることが判明し、2011年10月1日の読売新聞富山版に掲載された。資料はB5サイズで全32枚の内容である。当初あったはずの裏表紙は、どうやら経年劣化で破損してしまったようだ。なおこの資料については、現在は富山大学附属図書館によってデジタルデータ化され、一般にも広く公開されている。²

その後、発表者は資料の本格的な翻訳に取りかかった。GDJは実質3部構成で、内容は以下のとおりである。

導入部では、最初に日本人の地震に対する知見や、過去に日本で起きた地震と津波現象、そして安政南海地震の被害の実例などが紹介される。その後、明治三陸地震におけるリーフレット作成時点で報道されている情報や、原因の考察などが示されている。筆者はこの部分を書き下ろしだと思っていたが、調査の結果一部が転用されていることが判明した（詳細は後述）。

続いてこの先は、横浜在住の外国人記者（内容からイギリス出身と思われる）たちによる、明治三陸地震の被災地取材が話題となる。横浜から岩手県花巻町までの汽車の旅、花巻駅から同県釜石町（現釜石市）への馬と徒歩の旅、被災地の取材、そして釜石から花巻までの帰路が詳細に記されている。

6月21日。行きの汽車における状況と、花巻から遠野までの徒歩の旅が説明されている。一行ははじめ被災地全体を回って報告するつもりだったが、車内で出会った内務省県治局長の三崎亀之助に訪問先を一ヶ所に限定するよう忠告され、最大の被害を受けた釜石に絞ることにする。彼は記者たちに紹介状を書くほかに、一行の移動の困難を軽減するよう最大限の配慮を尽くしていた。花巻から遠野までの旅のうち、途中の宮守（みやもり）まで一行は人力車で進む。その人力車の手配は、三崎の便宜によるものだった。人力車が使えない宮守から先は、荷馬を用いての旅になる。雨に打たれながら、一行は遠野にたどり着き、ここに宿泊する。

6月22日。朝から釜石へ向けて山を越える旅になる。イングランド・デヴォン州の

リドフォード溪谷に準えながら、場違いなほど山の美しさを堪能している様子が見える。また釜石は鉄の産地であった関係で、早くから港への鉄鉱輸送用の貨物線が確保されていた。前述の三崎による紹介状が効果を発揮し、貨物線を走るトロッコの特別車に乗ることができる。やがて釜石に着いて、一行は佐々木由良蔵助役からの歓迎を受ける。

筆者は、高台にある釜石町役場から被災地の状況を見渡す。そして、釜石で津波に遭難したカトリック神父アベ・リスパルの行方を心配した、ふたりのカトリック神父に出会う。おそらく時間が前後しているものと思われるが、トロッコを降りてから被災地の惨状を目にするまでの様子が説明される。津波によってずらされた石碑や、沖から陸地へ流されてきた 2 艘の大型船、流されて破壊された多数の漁船、仮設病院となった学校での軍医たちの救護活動、そこでの瀕死の負傷者たちの様子などの描写を経て、服部保受町長の案内で市役所へと行くことになる。そこで一行は、津波の難を逃れた服部と佐々木、リスパル神父に付き添っていた日本人男性を取材して、生々しい証言を聞く。そして救助活動に当たった宿のおかみ、沖に出ていて難を逃れた漁師、地域の郡長などの証言が続く。その夜一行は、板垣退助内務大臣が後日宿泊する予定の特別室に泊まる。

6 月 23 日。一行は、町長の便宜によって小舟を借り、釜石町の中心部からその舟で湾を越える。その途中で一行は若い女性の遺体を発見し、どうするかを話し合った末、取材の帰りに収容することに決めて、白浜に上陸する。そこで現地の人々と話をする。しかし、精神的な負担も大きく、これ以上見聞を深めることの意義が見いだせないと考え、一行はこの場所を以って取材を終えることにする。そしてその帰り道で、一行は女の子の遺体をさらに発見する。同行していた船頭に遺体を託し、一行は帰途に着く準備を始める。帰途に着く前に、一行は釜石にある鋳物工場を見学する。移動に関する諸々の手配を済ませ、午後 8 時ごろ釜石を出発する。

6 月 24 日。大橋を経て、翌 24 日の午前 2 時すぎに遠野の宿にたどり着く。しかし宿は満室で、雑魚寝でよければという条件で宿泊にこぎつける。一行は翌朝 7 時に宿を出発し、12 時半に宮守に到着する。そして 16 時半ぐらいに土沢（つちざわ）に到着し、そこからそれまで以上に歩を速めて、列車が到着するわずか 15 分前に、花巻に到着する。

以上で旅行記は終わるが、ここでは記者一行以外に被災地に赴いた外国人から、新聞社に届いた手紙が最初に紹介される。

それ以降、記者たちの旅行記ではなく、新聞や雑誌、公的文書などに掲載されたと推定される記事をおもに英訳して、紹介している。最大の被災地である岩手県に割かれている箇所がもっとも多く、宮城県と青森県がその後に続く。6 月下旬ごろまでの情報が掲載されていることから、この資料が 7 月に出版された可能性を推定できる。

この資料の発見を受けて、静岡福祉大学附属図書館（焼津市）の進藤令子氏から問い合わせをいただき、企画展示に協力させていただくことになった。焼津はハーンが東京帝国大学に赴任して以降毎年のように夏に訪れていた、彼ゆかりの場所のひとつ

である。この縁で、進藤氏とは昨年度2度の企画展示を行うことができた。ひとつは昨年5月から開催された「小泉八雲と自然災害」展で、もうひとつはこれを受けて発展し、昨年11月から開催された『稲むらの火』誕生と服部一三」展である。両企画展とも、静岡福祉大学附属図書館のカウンター横の企画展示コーナーにて行われた。

2. ハーンと服部の出会い—ニューオーリンズ万国博覧会—

服部とハーンの出会いは、1884年末から翌1885年にかけて当時ハーンが新聞記者として活躍していたニューオーリンズで開催された万国博覧会（通称「国際綿花産業百年記念万国博覧会 (The World's Industrial and Cotton Centennial Exposition)」）に遡る。ニューオーリンズの観光文化についてまとめた Kevin Fox Gotham によれば、この万博は、綿花の積荷がニューオーリンズから欧州に向けて初めて出荷されてから100年経ったことを記念して開催された博覧会である（吉見、2010、p.49）。吉見俊哉や木下直之が指摘しているように、当時の日本政府は、欧米の万国博覧会に工芸品などの積極的な出展を行い、かつ欧米の芸術家や批評家たちに非常に大きな影響を与えていたことがよく知られている（吉見、2010、p.118, 124, 214-24、木下、2010、p.19-45）。ヨーロッパではモネやゴッホなど、当時の画家たちが日本美術に大きく影響されたことはよく指摘されるどころだが、アメリカでも類似の事例がある。J. M. Mancini は、1876年のフィラデルフィア万博で日本館が人気を博し、James Abbott McNeill Whistlerらの画家の表現方法に大きな影響を与えたことを指摘している（Mancini, 2005, p.12）。ニューオーリンズ万博自体は、1851年のロンドン万博、1862年のパリ万博、1873年のウィーン万博、1876年フィラデルフィア万博、1893年のシカゴ万博などと比較して、あまり知名度の高い博覧会とは言えないのが実情である。Gotham によれば、この博覧会は海外からの展示が少なかったことや、当初400万人を見込んでいた総入場者がわずか116万人弱にしかならなかったことなどを含め、興行的には失敗に終わった（Gotham, 2007, p.46）。ただし彼は、この博覧会が大企業や電力などの典型的な近代装置によって大規模に運営された点と、観光地としてのイメージが定着した点で、相応の意義があると考えている（Gotham, 2007, p.46-47, 65-68）。

このころの博覧会に出展した日本政府は、博覧会に内包される思想を、それらの起源である西洋の認識にすり合わせることに成功した時期だと考えられる。吉見によれば、明治期以降日本各地で「博覧会」と称する催しが開催されていた。明治半ばごろに開催された博覧会の傾向として、吉見は展示行為から見世物的要素が排除されるようになり、代わりに体系化や啓蒙といった単語に収斂するような、近代性を顕著に帯びるようになったことを指摘する（吉見、2010、p.130-138）。その例として吉見は、ウィーン万博とその責任者だった佐野常民が、西洋で興った博覧会に対し、より西洋の意図を汲み取った理解を示したことを挙げる（吉見、2010、p.123-130）。服部は、そのような時期に日本からニューオーリンズに責任者として派遣された。

なお服部に関しては、兵庫県知事時代の知己が顕彰のために没後およそ10年を経た1941年に刊行された伝記『服部一三翁景伝』が、確認できる事実上唯一の出版物

となる。服部は1851年長州に生まれ、岩倉具視の息子である岩倉具定に随行して1868年にアメリカに行き、1871年にニュージャージーにあるラトガース大学へ留学、1875年に学位を取得する。³ その後岩手県知事に就任するまで、官僚として文部省に奉職し、在職中、東京英語学校校長（旧一高）や大阪専門学校総理（旧三高）に就任する。前後して東京帝国大学の創設にも大きく関与する。万博後彼はアメリカからヨーロッパに渡り、視察を続ける（彼はアメリカより、ドイツの法制に関心を示したようである）。帰国後は再度東京帝国大学の運営にかかわったのちに地方行政に転じ、岩手県（1891-98）、広島県（1898）、長崎県（1898-1900）、兵庫県（1900-16）の県知事を歴任する。また1903年に貴族院議員にも任じられ、1929年に亡くなる。

大臣職などを経っていないため、服部の知名度自体はそれほど高くないが1896年の明治三陸地震時に岩手県知事の職にあったという事実は、東日本大震災以降の社会情勢を鑑みれば、その事績について学術的見地からの検討を加える必要がある人物だと言えるだろう。清水唯一朗は『近代日本の官僚』という本の中で、明治初期から大正時代までの官僚制度の変遷を、概略的に追いかけている。この本には明治時代の官僚の名が多数登場するものの、残念ながら服部への言及はない。しかし清水は、日本が1870年代以降、近代立憲国家へと向かう過程で多数の人材が欧米に留学したことを指摘する。服部も、当時の立身出世のためのルートに乗った人物のひとりであったと、考えられるのではないだろうか。

他方ハーンであるが、1885年前後は文筆家としての知名度がアメリカ国内において、全国区になりかかっていた時期と言える。彼はこの博覧会の運営を指揮していた新聞社 *Times Democrat* 紙の記者として活躍していたと同時に、この万博に合わせてクレオール料理のレシピ本 *La Cuisine Creole* や、クレオールのことわざ集である *Gombo Zhebes* という2冊の本を出版し、後の来日にもかかわる Harper 社の雑誌に、記事を寄稿するようになっていた時期である。松江市立図書館は、ハーン作品のみならず、当時の新聞や雑誌批評など関連する多数の古い記事を所蔵しているが、そのなかに当時の記事があるので、それを参照してみたい。ハーンは同誌の1885年1月31日号で、日本館を早くも取り上げ、詳しくその様子を説明している。彼はそこで、日本製の香炉、花瓶などの工芸品、絵画、刀などに大きな関心を寄せているものの、服部の名前には言及していない。その名がハーンの記事に初めて登場するのは、確認できるかぎり同年3月7日号の *Harper's Weekly* の記事である。服部はこの記事の中で、日本の教育が西洋の水準に決して劣らないことを力説している。ついで *Harper's Bazar* 3月28日号で、彼は再び日本館を取り上げている。ここで彼は以前の記事と異なり、工芸品よりも展示されている書籍に関心を寄せている。彼は、1883年に刊行された小石川庭園の植物誌 *Figures and Descriptions of Plants in the Koishikawa Garden*（伊藤圭介英訳）、日本の音楽教育に関する伊沢修二の著作などを紹介する。そしてこの記事の後半で、彼は服部の言葉を概略的に紹介している。そこで服部は、日本では十分な科学教育に必要な装置が、安価で揃うことをハーンに伝えている。

以上のことから、服部は、大学の創設や運営・維持管理体制の確立、学会の創設、

科学教育の水準向上など、近代国家の学術体制の確立に強い関心を寄せていた可能性が見えてくるのではないだろうか。彼のそのような関心は、明治維新を経て近代国家への道を着実に歩んでいた当時の日本社会の情勢とも、密接にかかわってくる。現時点の調査で断定することは難しいが、彼は、ニューオーリンズ万国博覧会で、国家の基幹となる教育制度や体制が西洋に劣らず十分に整備されている日本の現状を語る役割を期待されていたと考えられるだろう。

ここで、ハーンの来日直後の状況についても触れておきたい。彼はもともと、先に紹介した Harper 社の通信記者として、日本の記事を執筆するために来日した。つまり、彼が万博の記事や文学作品を出版した *Harpers Monthly* (現 *Harper's Magazine*) をはじめとする、同社が抱える系列雑誌に掲載されることになる記事を書くための記者だったのである。しかし、同社と稿料をめぐるトラブルになり、そのまま同社との関係を解消してしまう。他方服部は 1890 年、ハーンが来日した時点では文部省普通学務局長の職にあった。このとき、収入がなくなったハーンに手を差し伸べ、松江への就職をあっせんしたのが、のちに彼の友人となる Basil Hall Chamberlain と、当時文部省の要職にあった旧知の服部一三だったのである。ハーンはその後日本国籍を取得し周知のように小泉八雲と名乗るが、最初に派遣された場所が松江でなかったなら、彼の遍歴はきっとまた別の展開になっていたはずだ。

3. ハーンと服部の「意外な関係」

では、発表者はハーンと服部の「意外な関係」に、どのようにして気がついたのか。話は、ニューオーリンズ万博からおよそ 7 年、遡ることになる。1878 年 3 月、当時文部官僚だった弱冠 27 歳の服部は、日本アジア協会で日本の地震に関する発表を英語で行い、その内容を同会の紀要に残していた。発表者がなぜこの存在に気がついたかであるが、それは最初に紹介した GDJ に、“Mr. Hattori” という記載があったことに始まる。その箇所を引用してみたい。

「地震が引き起こした津波が深刻な被害をもたらしたという見つかるかぎりの最古の記録は 869 年 5 月のもので、服部氏が数年前にアジア協会で発表した報告の中で言及している。」 (GDJ p.1 翻訳と下線は引用者による)

上記の引用は、先の東日本大震災に関連してたびたび言及されていた、いわゆる「貞観地震」の紹介である。そこに「服部氏」がアジア協会で発表したという具体的な語句が出てきたところから、この「服部氏」が誰かを特定すべく、ヘルン文庫に収蔵されているアジア協会の紀要をさらに調査し、ここに記載されている「服部」が服部一三であることを確認した。服部は明治三陸地震時の岩手県知事であっただけでなく、日本の近代地震学の確立にも大きくかかわっていたのだ。さらに彼は 1880 年から 2 年ほど日本地震学会の会長職にあり、その立ち上げにもかかわっていた。⁴

服部の論文はアジア協会での発表の記録を、そのまま文章に起こしたものだと思う

れるが、GDJ と共通する箇所を挙げたい。それはとりわけ GDJ の冒頭に集中している。日本における地震の歴史を概略的に紹介した GDJ の導入部は、この論文をもとに要約を行ったものである。また、とりわけ GDJ に登場する安政南海地震の高知の状況を紹介したところは、事実上の転載を行っている。

この論文に通底する問題設定は非常に単純で、古文書や古い文学作品などに記述された過去の大地震の記述を調査し、英語で概略的に紹介したのみである。また客観的な記述の羅列になっている箇所も少なくない。ただし、この論文は英語だけでなく、文語と口語の日本語の「三者」に通じていないと、おそらく発表や執筆ができない内容だったことには気をつける必要がある。アメリカ留学帰りの服部は、その条件を満たす数少ない人物だったのだ。

まず服部は、日本における地震にまつわる問題を取り上げるうえで、漢籍（『後漢書張衡伝』）に収録されている地震計をまず紹介する。彼はその複製品を陶工に作らせており、発表のさいに披露しているようである。それから、陰陽道や鯰、神話など、当時の地震に関する伝承や民間信仰を紹介する。前置きを経て、彼は日本書紀に記された416年から1872年までの地震を紹介する。彼は京都や江戸などの人口密集地と、そうでない場所の記述の残り具合に偏りがあることに注意を払いながら、この作業を行っている。そして、古い時代よりも比較的直近である江戸時代以降の地震のほうが、必然的にその記述に厚みがあることにも、同じく彼は気がついている。

この発表を締めくくるにあたり、服部は以下のようにまとめる。日本で地震が終息したとは言えないこと、日本のほぼ全域が地震の脅威にさらされてきたこと、ほぼ10年に1度程度の間隔で大地震が起きていること、さらに大地震が短期間のあいだに集中すること、大地震の予兆として異常気象が起こりうること、最後に大地震に先立ち、磁気の異常が発生する可能性があること。以上の仮説を示して、論文は結ばれる。そして、彼のこの発表がもたらした反響の大きさは、質疑応答で示された多彩な反応に表れていると言えよう。そしておそらくはこの発表と論文がきっかけで、彼が地震学会会長に推挙されたと考えることができるだろう。

ハーンが所蔵し、富山大学附属図書館所蔵のヘルン文庫に遺した1部のリーフレットから始まった調査と翻訳作業は、思いがけぬ形で発展した。彼の来日に大きくかかわった服部一三は、明治三陸地震当時の岩手県知事であっただけでなく、日本の近代地震学の立ち上げにもかかわっていたのである。現状、服部に関する調査はまだそれほどなされていないので、筆者の今後の課題となることだろう。

¹ 同資料については、以下 GDJ と略記する。

² 富山大学附属図書館のレポジトリである、ToRepo を参照のこと。リンクについては、<http://utomir.lib.u-toyama.ac.jp/dspace/handle/10110/10652>

³ William Elliot Griffiths (1843-1928) は、日本におけるラトガース大学の卒業生を紹介した講演の中で、服部の名に言及している。Griffiths, 1916, p.23.

⁴ なおこれは、同郷の工部官僚山尾庸三 (1837-1917) が会長就任を辞退した関係で回ってきた職であった。

引用文献

- 木下直之、『美術という見世物—油絵茶屋の時代—』講談社、2010。
 清水唯一朗、『近代日本の官僚—維新官僚から学歴エリートへ—』中央公論新社、2013。
 吉見俊哉、『博覧会の政治学—まなざしの近代—』講談社、2010。
 Gotham, Kevin Fox. *Authentic New Orleans: Tourism, Culture, and Race in the Big Easy*.
 New York: New York UP, 2007.
The Great Disaster in Japan, 15th June, 1896. Yokohama: Japan Gazette, 1896.
 Griffiths, William Elliot. *The Rutgers Graduates in Japan*. New Brunswick: Rutgers
 College, 1916. 7th Mar 2010. Internet Archives. Cornell University Library. 1st
 July 2013. <https://archive.org/details/cu31924023312899>
 Hattori, Ichizo. “Destructive Earthquakes in Japan.” *Transactions of the Asiatic Society of
 Japan* 6. 2 (1878): 249-75.
 Hearn, Lafcadio. “The East at New Orleans.” *Harper’s Weekly*. [7th Mar. 1885]. ※
 ----- “The New Orleans Exposition.” *Harper’s Weekly*. [31st Jan. 1885]. ※
 ----- “The New Orleans Exposition -- Some Oriental Curiosities --.” *Harper’s Bazar*.
 [28th Mar. 1885] ※
 Mancini, J. M. *Pre-Modernism: Art-World Change and American Culture from the Civil
 War to the Armory Show*. Princeton: Princeton UP, 2005.

※ これら3点の資料については、松江市立中央図書館が所蔵する、ハーンに関する資料を集めた「モース・コレクション」から引用した。これらの引用元は切り抜きであり雑誌の巻号等が判明しないため、明示されている発行日を以って代えた。

本論文の執筆にあたっては、富山大学附属図書館の栗林裕子氏、静岡福祉大学附属図書館の進藤令子氏、岩手県立図書館の似内千鶴子氏、松江市立中央図書館の廣江誠一氏にそれぞれお世話になりました。ありがとうございました。